

平成23年 5月 6日現在

機関番号：32601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：21720010

研究課題名（和文） フーコーを中心とした、フランス現代哲学における主体理論の展開

研究課題名（英文） The status of subject-theory in French modern philosophy : Michel Foucault and his predecessors

研究代表者

阿部 崇 (ABE TAKASHI)

青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：60508175

研究成果の概要（和文）：フランス現代思想においては、哲学的主体とそれを取り巻く「環境」の対立ないし相互関係が重要な問題であるが、フーコーがそれについて現象学的説明とは異なる図式をどのように構想したかを検討し、真理の「場」自体が主体を析出する経験となることをフーコー後期の思考を通じて明らかにした。また、その思考が生み出された背景としての哲学的思考の系譜を検討することで、フランス科学認識論からの影響関係を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：One of the important issues in the French modern thoughts is the rivalry of a philosophical subject and an "environment" as its existential condition. We studied how Foucault conceptualized a new theory about subject-environment, which differs from a phenomenological theory. According to the late foucaultien thoughts, it is a space of the truth that makes some experience possible, which generates the subject itself. We studied also the backgrounds of such foucaultien thoughts and revealed a relation between the modern French philosophy and the epistemology.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：西洋哲学、現代思想

## 1. 研究開始当初の背景

デカルトが「コギト」としての主体像を提示し、カントが「理性批判」の営みを通じて認識主体の理論を基礎付けたように、「主体」

が近代の哲学における伝統的な主題であったとすれば、現代哲学における主要な主題として、「環境」の問題が浮上してきた。

たとえば、現象学のインパクトから出発した戦後フランスの哲学においては、環境とし

ての世界についての問いは、時には認知科学や心理学の方向へ（メルロ＝ポンティ）、時には実存主義・政治の方向へ（サルトル）接合された。さらに、言語学理論やレヴィ＝ストロースなどの人類学に由来する「構造」の概念が発見されることにより、哲学における環境の問題はもはや主体との二項対立において論じられるのではなく、主体にとっての「無意識」として、主体の存在自体を規定するシステムとして問題化された。

今回の研究で中心軸となる（そして、私が専門とする）フーコーも、上記のような問題の枠組みを共有しつつ、主体と環境の関係、そして、体系としての〈知〉や〈権力〉の分析を行った。フーコーがどのような方法論を用いて独自の主体理論を練り上げたか、フーコー以外の哲学・思想との比較対照を含めて研究を発展させることが研究の背景となる目標であった。

フランスにおいても今日、現代哲学の生成過程を問い直し、新たな主体理論を模索しようとする動きが盛んだが（その一例として、Vincent Descombes, *Le complément de sujet*, Gallimard, 2004 を挙げる）、私の研究も、そうした思潮に呼応しつつ、さらにその問いの持つ地域性（フランス的、ヨーロッパ的性格）をも批判的に捉えることを目指すものであった。

## 2. 研究の目的

研究の全体的な構想は、ある具体的な時代・場所において認識し思考する「主体」と、その主体を規定し構成する「環境」の関係性について、フランス現代哲学がそれをどのように問題化したかという歴史を明らかにし、その問題系がフランス現代哲学にどのような展望を拓いていくかを明らかにすることである。

今回の研究はその出発点となるもので、私が今まで研究してきたミシェル・フーコーの哲学的思考を、哲学的・思想史的系譜と展望の中に位置づけなおした上で、そこに見出される新たな問題系と方法論を通じて、われわれが今後向き合うべき哲学の方向性を探ることを目指すものであった。

この研究は、これまでの研究を概括し、そこから新たな研究を整理・発展させるための基礎研究と捉えられるものであり、さほど長期にわたるものではない。そのため、研究期間は2年間に設定した。

## 3. 研究の方法

フーコーの思考の研究を核としながら、フランス現代哲学における主体理論の歴史的な変遷と今後の展望を探るのが本研究の目標とするところであったが、まず一年目（平成21年度）は、フーコーの著作を時代のコンテクストを視野に入れつつ分析し、フーコーによる問題設定のあり方を解明することを目指した。ついで二年目（平成22年度）は、フーコーの思想を主題的に検討する前述の研究を基礎に、フランス現代哲学において主体の理論が歴史的にどのように問題化されてきたかを解明し、現在の哲学的・社会的コンテクストにおける「主体」理論の可能性を探った。

以下、それぞれの年度ごとの内容を記述する。

### (1) 平成21年度

フーコーの著作を時代のコンテクストの中に置いて分析する作業の一貫として、フーコーが1970年代から80年代にかけてコレージュ・ド・フランスで行った講義を主な研究対象として扱った。

フーコーの講義録は現時点で、全十三巻予定されているもののうち八巻ほどがフランスで刊行され、日本でも邦訳が刊行されつつある。その講義の内容は多岐にわたるが、大雑把に述べるなら、権力と知の相関関係（純粋な真理と思われているものの背後には何らかの権力作用やそれを可能にする諸条件が存在し、真理は作為的な性質を帯びている、とフーコーは考える）を、精神医学や監獄施設などの局所的領域をめぐる社会的実践の歴史を探った1970年代前半、局所的領域にとどまらず、時には国家の枠組みをもはみ出すような、人間たちの集合を統治しコントロールする「政治」という領域のメカニズムとそれを支える知のあり方を探った1970年代後半、そして、そこから摘出された「統治性」という概念をもとに、個人としての人間（および人間同士）のレヴェルでどのような権力の関係と知の関係が存在しているかを明らかにした1980年代の講義、という三つのグループに分類できよう。

「主体」という主題をめぐる今回の研究には、主にその第三番目の問題系、すなわち個人のレヴェルから見られた統治する者と統治される者の力関係、およびそうした権力関係を変容させ逆転させる可能性、という問題系を含むフーコー晩年の講義を中心に検討することとなった。とりわけ対象としたのは1982-1983年度の講義（『自己と他者の統治』）であったが、まずその内容についての詳細な分析を行い（ギリシア哲学やギリシア悲劇などに現れる「パレーシア」という実践行為をめぐって、その行為者としての主体がどのように形成され、それがどのように主体自身に

変容をもたらすか)、ならびに同時代の他の政治的・文化的出来事(フーコーが主体を論じるに至った社会的背景)、また他の哲学者の思考(とりわけドゥルーズやメルロ＝ポンティなどがどのような思考によって主体を問題化したか、そしてそれがフーコーの主体論とどのような関係を持ちうるか)、さらにはフーコーの他のテキストの分析などを行った。それによってミシェル・フーコー後期の思想における「主体」理論の特色を明らかにした。それによれば、フーコーのイメージする「主体」とは、純粋な認識の中心として特権的な場所に位置づけられるものではなく、具体的な政治的状況や権力関係のうちに置かれ、その「環境」としての力を受けつつ、さらにその外部の力への反応・抵抗としての内部の力をも纏り合わせつつ、自らが自らを形成してゆくものである。さらに、そうした主体は主体同士の相互関係のうちで形成されるものでもあり、「教える」立場にある主体からの教育という主題もそこに大きく関わっている。

以上のような研究は基本的に単独で行い、フーコーの著作を検討すると同時にその翻訳・刊行作業も行ったが、それ以外にも、研究協力者との数度にわたる討議を行った。ここでは、フーコーの「真理の主体としての自己」の問題系をストア派哲学(セネカなど)の理論をもとに明確化する作業を行うとともに、フーコー理論と表象文化理論(映画論、絵画論等のイメージ論、また現象学的イメージ論における主体理論)との関連と主体の問題についても扱った。

## (2) 平成 22 年度

前年度の研究を基礎にしつつ、現在の哲学的・社会的コンテクストにおける「主体」理論の展望を示すことを目指した。当初は、精神分析・心理学の系譜的研究というプログラムを想定していたが、心理学関係の資料収集にまだ相当の時間が必要であることや、とりわけ、精神分析の理論についての膨大な先行研究を追うことなくして「精神分析における主体理論」を扱うことに問題があると考えられたため、その内容を変更し、まずフーコーがその主体論を提唱するに至る背景としてのフランス科学認識論の系譜(とりわけガストン・バシュラール、ジャン・カヴァイエス、ジョルジュ・カンギレムといった、直接・間接に科学認識論にかかわる思考)を検討した。精神分析や心理学という極めて高度に専門的な学問領域をそのまま対象とするよりも、むしろそうしたさまざまな「科学的思考」を共通して支えている認識論的アプローチの方を、フーコーの思考との関連性に注目して検討しようと考えたのである。

また、それに関連して、現代哲学における主体理論との関係から見た構造主義理論の再検討を行った。構造主義という、それ自身が科学認識論の土壌(とりわけ数学的思考)から生まれたものを取り上げ、フランスで 1960 年代を中心に巻き起こった構造主義論争の歴史を追うことで、そうした科学的思考そのものの歴史性・地域性をも明らかにできると考えた。レヴィ＝ストロース等の初期の構造主義理論がサルトルらの主体理論をいかに批判し、主体と歴史の関係をどのように科学化しようと試みたかを主に研究した。

また、この年の夏にはフランス(パリ)へ調査のための出張を行い、図書館などで調査を行った。とりわけ科学認識論などについて、わが国では入手が難しいと思われる資料の数々を入手した。さらに、フランスの研究者数名と面会して意見交換し、フランス現代思想における科学認識論の系譜について、またミシェル・フーコー周辺の思想が現代の政治的・文化的状況のうちでどのようなアクチュアリティを持っているか、といった天について新たな展望を得ることができた。

## 4. 研究成果

今回の研究は「主体」と「環境」との二項対立という問題が、フランス現代思想においていかに問題化されたかという点から出発しているが、デカルト以来の近代的哲学思考における認識主体としての抽象的な主体論は言うに及ばず、現象学的思考(とりわけメルロ＝ポンティ的な)にあるような「主体」と「世界」との相互嵌入といった説明とも異なる図式を提示することが必要であった。その点において、フーコーが『自己と他者の統治』講義において検討している「真実を語ること(パレーシア)」という主題を、哲学する主体と真理との関連、そしてそれが自己を主体として構築し、他者を統治する主体となる過程として検討し得たことは大きな成果であった。

主体と環境の関係について、その両者がともに生成する「場」としての「パレーシア」を想定することで、従来の哲学的思考を規定しがちであった二項対立を乗り越える端緒を見出せたと同時に、フーコーの理論における哲学と政治との関係の独自性、そして主体の構成との関連における哲学的真理のあり方を明らかにすることができたと考える。そうした点については、フーコーの当該講義録の翻訳および解説の出版というかたちでまとめ、世に送ることができた(『自己と他者の統治』講義の翻訳刊行)。この講義録をめぐっては、すでに様々な研究者が注目して独自の分析を行いつつあり、そうしたさまざま

な反応をふまえ、また積極的に他の研究者との意見交換を行いながら、今後の私自身の研究を進めてゆくことにしたい。

また、二年目の研究については、フーコーの思考および構造主義的思考の系譜を明らかにすることが一義的な目標だったが、今回の研究では、フーコーがカンギレムやバシユラルの科学認識論の系譜に連なっていることを確認しただけでなく、とりわけジャン・カヴァイエスの数学理論などからも問題設定上の大きな影響を受けているという論を提出することができた。

つまり、1960年代のフランス思想において問題となった「主体批判」へのフーコーの応答として、認識主体の存在から出発する思考ではなく、そこから画然と切り離された純粋な「対象」を見出すことが目指されていたのであり、その目標設定においてカヴァイエスの数学的対象についての議論が参照されており、それがフーコーの1970年代以降の言説分析の方法論へと道を開いたのである。以上の論点については、表象文化論学会でのパネル発表を行うとともに、論文として発表した。

今回の研究においては、まず一方でミシェル・フーコーの晩年の思考における「主体」と「環境」の関係を止揚的に分析しうる新たな概念を検討することができ、また他方でフランス現代哲学における「主体批判」の系譜を明らかにすることができた。しかしながら、現在のところ、その二つをさらに総合的に検討するには至っていない。今後はフーコーの思考にとどまらない、また「批判」の段階にとどまらない肯定的な主体理論の構築のされ方についても検討する必要があるだろう。今回の研究においては、そのための準備段階として、主体が主体自身に対して働きかける契機としての「批判」や「啓蒙」という主題をめぐってカント、ハーバーマス等の議論の検討に着手したところであるが、この問題系についてはさらに研究を進め、今後の展開を期すこととしたい。

なお、今回学術的な論文としてまとめられなかった様々な問題系については、一般の読者向けの定期刊行物（商業誌）のコラムや対談、書評などにおいて発表する場を持つことができた。そのことについてもここで付記しておきたい（以下「5. 主な発表論文等」の〔その他〕を参照）。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 阿部崇 「「近代」という体制からの脱却を企てること——ミシェル・フーコーの哲学的方法とフランス科学認識論の系譜」、『神戸市外国語大学 外国学研究』、査読無、第79巻、2011年、47-61ページ。

〔学会発表〕（計1件）

- ① 阿部崇 「フランス・エピステモロジーの系譜とミシェル・フーコーの哲学的方法」、表象文化論学会第5回大会、2010年7月4日、東京大学駒場キャンパス。

〔図書〕（計1件）

- ① ミシェル・フーコー（阿部崇翻訳・解説）、筑摩書房、『自己と他者の統治：コレージュ・ド・フランス講義 1982-1983年度』、2010年、528ページ。

〔その他〕

（商業誌への執筆のうち、必ずしも学術的な内容ではないが、本研究と直接的・間接的に関わるもの）

- ① 阿部崇 「「生命」の問題系にフーコーを接続するという試み——「人間」なきあとの思考の可能性」（檜垣立哉『フーコー講義』書評）、『図書新聞』、2011年3月26日号、5ページ。
- ② 阿部崇 「フランソワ・キュセ著『フレンチ・セオリー』書評」、『週刊読書人』、2011年1月28日号、4ページ。
- ③ 阿部崇 「数と言説、二つの内在平面」（研究ノート）、『現代思想』、2011年1月号、230ページ。
- ④ 阿部崇・國分功一郎 「二〇一〇年のフーコー——阿部崇・國分功一郎対談」、『週刊読書人』、2010年6月18日号、1-2ページ。

（参考URL）

学会発表の報告（表象文化論学会ホームページ）：

<http://repre.org/repre/vol10/conference05/03panel09.html>

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿部 崇 (ABE TAKASHI)

青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：60508175